



狩猟採集民の子どもの民族誌
森の小さなハンターたち

亀井伸孝

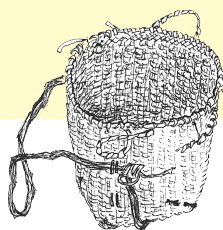
定価 3570円 (税込)
ISBN 978-4-87698-782-5

圧倒的なリアリティで迫る、 森の子どものフィールドワーク

★ 箕浦 康子氏 推薦！
(お茶の水女子大学名誉教授)

本書は、カメルーン共和国東部の森の狩猟採集民バカ・ピグミーの子どものなかでの1年半の記録である。まず、近代的諸制度導入前の社会で子どもはどう生きていたかをトータルに捉えている点が、専門分化し特定の視角から子どもを見がちな研究への反省をせまる。また、日本の子どもたちとは正反対の社会状況で生きるバカの子どもの記録は、文化や時代が子どもの生活をいかに変えたかを逆照射する。子どもの発達や社会化に関心のある心理学、教育学、社会学、社会福祉学、学校教育関係者、保育関係者、必読の書である。

本書は、子どもを相手とするフィールドワーク研究としても出色である。一人前の男性が子どもたちに仲間として受け入れられていくプロセスやスケッチを描くことを通じて形成されるラポール、スケッチ自体がバカ社会の物質文明の巧みな記録になっている点などは、従来の研究書にない特色で、フィールドワークを研究手法としている人にも一読を勧めたい。



(フィールドノートより)

一般社団法人

京都大学学術出版会 営業室

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9京大会館内

電話 075-761-6182 FAX 075-761-6190

URL <http://www.kyoto-up.or.jp> Email sales@kyoto-up.or.jp



狩猟採集民の子どもの民族誌

亀井伸孝

森の小さな ハンターたち

教育とは何か？

本源的問いに挑む愉快で可愛い民族誌。

子どもを主題とした狩猟採集民の研究——この一言で本書が、「オンリーワン」の研究であると価値付けることが出来る。

従来的人类学は、「子どもは文化的に未完成の存在」という思考枠組を抜け出せず、子どもは、育児や教育などおとなが行う行為の対象として描かれた。それに対し、著者はカメルーンの狩猟採集民（いわゆるピグミー）の子どもそれぞれ自体を研究対象とし、子ども集団に日々参与観察することで、狩猟採集活動や遊びなど日常活動を詳細に記録・分析する。そこから見えてきたのは、子ども達が主体的に行動を選択し遊びを創造するという、しかも、その過程を通じて社会の全体文化に寄与しているということだ。

実は狩猟採集民の社会には「教育」という営みがない。大人が導かなくても、子どもは、狩猟採集民らしく成長していくのだ。一方、彼らの社会にも近代の波は押し寄せ、国家やカトリック伝道団による学校教育も浸透してきている。それが伝統社会をどう変えようとしているのか、あるいは、伝統社会が近代をどう飼い慣らそうとしているのか。本書には、学校における子どもたちの「抵抗」「適応」が愉快に描かれる。

可愛い森の民を生き生きと描き出し、人類学における教育とは何か、という本源的な意味での問いに答えようとする、画期的著作。